

発表題目：人間のもめごとに参加する動物：
北海道におけるシマフクロウの保全と観光利用の対立をめぐって

所属：大阪大学大学院 人間科学研究科（博士後期課程）

氏名：韓智仁

1200 字程度で発表内容を記載してください。

本発表は、北海道で希少鳥類のシマフクロウの保全を行う科学者と、シマフクロウを観光利用する宿のあいだでの「もめごと」の展開やそれへの科学者らの対処について、人間と人間以外の存在との連関に注目して描き出す試みである。本発表では、関係者へのインタビューに基づき、もめごとの経緯をたどる。経済活動と環境保全の間での対立だと一般に理解されているこのもめごとが、科学的な実践のなかでのシマフクロウの関与や知識をめぐる争いでもある点を明らかにする。

シマフクロウは日本では北海道のみに 100 つがいが生息する絶滅危惧種である。生息地の環境悪化によって数を減らしたが、1984 年より環境省の保護増殖事業が進められており、行政と科学者らが中心となって保全や調査が行われている。

北海道には数箇所、野生のシマフクロウを見ることができる宿が経営されている。宿に設置された給餌場へ近づいてきたシマフクロウを、宿泊者が見たり撮影したりすることができる。これらは市民が野生下のシマフクロウに近づく数少ない機会となっている。

だがこうした営業には保全推進の都合から非公開にされている営巣地の情報が実質的にオープンになっているという問題があることに加え、餌付けや人との接近による繁殖への悪影響が懸念されている。科学者らは宿へ抗議を行ってきたが、シマフクロウが地域の貴重な観光資源となっていること、そして科学者らがシマフクロウについての情報を独占していることへの不満が宿や観光関係者から反対に主張され、事態は紛糾していた。

本発表では、科学者らによる 2 つの対処術をとりあげる。①シンポジウムと論文化：科学者たちは、2015 年に知床で公開シンポジウムを開催し、そこに宿や地域観光業の関係者らを招いた。保全活動の内容を調査データとともに紹介するとともに、餌付けのリスクが改めて表明され、またフロアとの質疑応答の場が設けられた。そしてこのシンポジウムの模様や、観光宿の問題は論文として公開されている。②モニタリングサイト：シマフクロウ研究者の早矢仕有子教授（北海学園大学）は、「公開してみんなで守る」という方針のもと、野生のシマフクロウ 1 つがいが巣や給餌場にいる様子をライブ画像で見ることができるウェブサイトを 2014 年より限定公開している。動物園や宿泊施設とは別のかたちで市民がシマフクロウを見られる手段となっている。

本発表ではこうした事態・対処について、科学技術の人類学の観点から整理する。このもめごとは、シマフクロウを「見せる」ことをめぐってのものであるが、科学者らはその対処として、シマフクロウを別のかたちで見せることにした。つまり、科学的データや画像として変換されたシマフクロウを論争のなかに組み込み、新たに人を関わらせ、この鳥の「実在」（＝道具や技術の伴う実践によって成立する存在のありよう）を編成しなおした。このようにもめごとの対処術を、人と人、人とモノを連関させる実践として記述することで、この対処術の科学実践としての特徴を検討する。

本事例は関わる人数や経済規模も大きくはないもめごとだが、日本の環境保全にとまなう困難や、科学実践における社会との複雑な交渉の様子をよく表している。動物やモノと人の連関に着目することで、その一端を仔細に考察できる。